

産業地域における都市の変容：トラベリング会議

Travelling Conferences on Urban Transformation in Industrial Regions



当日の会場の様子

2019 年 11 月 18～19 日、大阪市立大学の学術情報総合センターにて、産業地域における都市の課題についての研究を促進することを目的とした国際会議を行った。日本を皮切りに、韓国、ドイツ、アメリカをトラベルする会議を 2020 年 9 月まで、4 回開催するドイツ文科省助成のプログラムである。炭鉱と鉄鋼産業の拠点であったドイツのルール地方の Competence Field Metropolitan Research と IN-EAST School of Advanced Studies on Innovation in East Asia と、龍谷 LORC と都市研究プラザとの共催で実施した。

二日間にかけて、27 人の発表者・参加者が研究発表などで学生も含む 50 名ほどの一般の出席者とも交流しながら、都市の変容を議論した。1 日目には宮野道雄（大阪市立大学学長補佐）と Thorsten Wiechmann（ドルトムント工科大学）の挨拶から始まり、第 1 セッション「都市地域の変容：関西からの教訓」では、マクロなデータを用いた脱工業化による所得層格差の拡大の検証、北区長による大阪市の大川の水辺空間の再生、また淀川の持続可能な開発目標、大阪市の近年の人口の都心回帰と日本型ジェントリフィケーションの提示などの発表があった。第 2 セッション「都市地域の変容：ルールか

らの教訓」では、ルール地方と脱工業化による都市構造が議論された。さらに、ルール地方に大きな影響を与えたエムシャー川の再生プロジェクトについて地域再生の現場からの報告があった。その後、討論会で議論がさらに深まった。

2 日目は阿部昌樹（都市研究プラザ所長）の挨拶から始まり、「都市の変容についてのトラベリング概念：産業遺産の適応性のある再利用」と題した第 3 セッションが続いた。イギリス生まれの田園都市概念の様々な定着について、大阪市インナーシティの老朽賃貸住宅のアートによる再生、産業の空洞化によって生まれた空き家のリノベーションの湾岸地域の事例紹介、そして北九州とアメリカのベスレヘムからエムシャー川の再生プロジェクトの国際的な影響を議論した。

午後には、堺市から大阪市のベイエリア・埋め立て地のバスツアーで、参加者は藪内弘（元大阪市港湾局長）と水内俊雄（大阪市立大学教授）の解説を聞き、脱産業化による都市の変容をより生々しく経験できた。最後に、文化住宅をリノベーションした焼き肉レストランで、交流をさらに深めた。

■ヨハネス・キナー（埼玉大学准教授／URP 特別研究員）



巡検中、天保山渡船場で渡船を待つ参加者

From 18-19 November the Travelling Conference was held in Osaka, as a collaboration between the German Competence Field Metropolitan Research and IN-EAST School of Advanced Studies on Innovation in East Asia, with LORC and URP. It was the first of a series of four conferences conducted in Japan, South Korea, Germany and the USA in order to foster research on urban transformations in industrial regions. In the Osaka conference this topic was discussed in three sessions, covering lessons from Kansai and the Ruhr on the transformation of urban regions and discussing concepts of adaptive reuse of industrial heritage. This was rounded up by a panel discussion, comparing experiences of urban transformation and a bus tour through Osaka's former industrial belt.

先端的都市特別研究員（若手）の研究について

Introduction of the URP Special Researchers (Young, Leading Edge Urban Studies)

都市研究プラザでは、グローバル COE 拠点としての活動実績を継承し、自発的かつ国際水準の研究活動を支援することを目的として、国際公募による若手研究者の育成につとめてきた。現在、2名の若手研究者が在籍している。その研究内容等について紹介する（順不同）。

■湯山篤

私は、東アジアの福祉、特に東アジアの貧困対策に関心を持って研究を進めております。これまででは、ホームレス問題の日韓比較や公的扶助制度の日韓比較を通じて、東アジアの福祉を理解するための足がかりを模索してまいりました。



これまでの研究では国レベルの政策に焦点を当ててまいりました。公的扶助にせよ公的年金にせよ、国レベルの政策がインパクトを持つためです。

ただ、実際のところ、貧困対策や生活困窮者支援は自治体レベルの方針や民間団体の取り組みを土台にして動くことも事実です。関西の例を見ても、京都ジョブパークの取り組みや大阪しあわせネットワークの社会貢献事業など、自治体レベルの取り組みが非常に重要な役割を担っています。韓国の場合も、ソウル市独自の公的扶助制度や京畿道独自の若者向け現金支給制度など、自治体の積極的な取り組みが目立ちます。

今は改めて「自治体レベルの取り組みでどこまで福祉を確保しうるのか」、「財政的に余裕のない自治体でも福祉を確実に提供するためには、国にどのような政策が求められるのか」といった質問を立てて「東アジアの福祉」を再考する作業を進めています。国レベルのサポートがしっかりしない限り「福祉政策の地域間格差」が生まれかねませんので、今後はこのあたりに注目した国の動きに注目していきたいと考えています。また、これまででは日本と韓国を比較するに止まっていましたが、今後は台湾までを視野に入れて研究を展開して行ければと考えております。

■松下茉那

神戸大学国際協力研究科博士後期課程2年の松下茉那と申します。2018年3月に、同研究科の修士課程を修了し、神戸市役所へ就職し、現在は、介護保険や後期高齢者医療保険の業務に携わっています。

私の関心分野は、韓国の高齢者福祉で、修士論文では、

「韓国の高齢者の自殺予防対策における民間団体の役割」というテーマで取り組みました。

私は、学部生の時に、韓国の高麗大学校へ1年間、修士課程在学中に、ソウル大学校へ1年間、交換留学生として留学をしました。特に、ソウル大学校留学時は、文部科学省の「トビタテ留学 Japan!」という奨学金を頂き、自身で留学プランを計画し、大学院での研究だけではなく、学外でも活動をしてきました。具体的には、ソウル市外国人インターンシッププログラムに参加し、ソウル市住宅供給公社にて勤務し、韓国の住宅福祉について知見を深めたり、地域の高齢者福祉館にてボランティア活動を行ったりしました。こうした経験を通して、机上の議論だけでは見えてこない現代の韓国社会に置かれている高齢者の実情を学んできました。

今後も、韓国の高齢者福祉に関して多角面から検討し、研究し続けたいと考えております。どうぞ、よろしく申し上げます。



By succeeding the achievements of the Global COE Hub, the Urban Research Plaza dedicates itself to educate young researchers, through the recruitment of Special Researchers on an international scale, with the aim of supporting autonomous research activities with international standard. Currently, two young researchers are enrolled in this program.

第25回釜ヶ崎講座・講演の集い
農業分野の仕事づくりを釜ヶ崎で
The 25th the Kamagasaki Seminar/Reunion:
Agricultural Job Creation in Kamagasaki



大阪市西成区の釜ヶ崎では仕事づくりに関する議論が積み重ねられてきた。これまでも「釜ヶ崎講座・講演の集い」の一環として「仕事づくり集中

講座」が同講座の主催により回を重ねられてきたが、今回は都市研究プラザと共催する形で12月14日にエルおおさかにて開催した。

人材不足と高齢化が進む農業分野と、労働市場から排除されがちな労働者に就労機会を提供する福祉分野の連携、すなわち「農福連携」が注目を集めている。以前から、釜ヶ崎でも、野宿労働者や就労困難を抱える若者の参加のもと、耕作放棄地を活用して農園を開設するなど、農業分野で仕事をつくる試みがなされてきたが、いくつかの課題に直面している。そこで、釜ヶ崎における有意義かつ持続可能な取り組みのために何が必要かを先進事例に学びながら議論しようというわけである。

講師として、埼玉福興株式会社、代表取締役の新井利昌氏、株式会社えと菜園、代表取締役、NPO法人農スクール、代表理事の小島希世子氏をお迎えした。両氏はそれぞれ、『農福一体のソーシャルファーム—埼玉福興の取り組みから』（創森社、2017年）、『農で輝く！ホームレスや引きこもりが人生を取り戻す奇跡の農園』（河出書房新社、2019年）を刊行している。

来場は70名ほど。釜ヶ崎をはじめ大阪周辺における実践事例の報告のあと、上記お二方の講演を受け、パネルディスカッションにて議論を深めた。進行の不利により、フロアからの発言を受ける時間が取れず、消化不良の感が否めないことが悔やまれる。深く反省するとともに、ご来場いただいた方々に深くお詫び申し上げたい。

開催にあたり、公益財団法人ユニバーサル財団およびトヨタ財団より助成を受けた。本企画の内容は、両財団に提出される報告書に掲載されるとともに、単体の報告書としても公表され、URPレポートシリーズに加えらるる予定である。

■網島洋之（URP 特任講師）

The so-called “Agriculture-Welfare Cooperation” is getting attention: it is about a cooperation between agricultural sectors facing a lack of human resources and an aging workforce, and welfare sectors providing employment opportunities to workers tending to be excluded from labor market. In Kamagasaki, there has been an attempt to create job opportunities in agricultural sectors. The participants discussed on what is necessary for fruitful and sustainable activities, by referring to precedents.

第9回オープンナガヤ大阪2019
The 9th Open Nagaya Osaka 2019

2019年11月16日（土）・17日（日）に大阪市立大学長屋保全研究会とオープンナガヤ大阪2019実行委員会主催のもと、「暮らしびらき」イベント「第9回オープンナガヤ大阪2019」を開催しました。本イベントは、大阪市を中心とした減り行く大阪長屋の保全活用を目的とし、現代の暮らしに合わせた改修や活用の方法を広く公開するほか、長屋の良さやそこにしかない個性を様々な人々に知ってもらい、年に1度のオープンハウスイベントです。

今年は大阪市以外に東大阪市、柏原市の長屋を含む44の長屋会場と3コースのまちあるきプログラムを行い、延べ4000人を越える来場者がありました。それぞれ住居・店舗・オフィス・工事途中などの用途の中から、自身の興味に合わせた長屋を回ったり、ワークショップに参加したりと楽しむ様子が見られました。

メイン会場である都市研究プラザ豊崎プラザ（豊崎長屋）では昨年同様、オープニング・クロージングイベントが行われました。また、豊崎での活動に長く関わっている研究員による、豊崎長屋見所ツアーが開かれ、長屋愛好家や長屋所有者、学生、外国人など数多くの方が参加しました。同会場の「風東長屋」では、改修工事前の内覧と模型展示が行われました。改修をデザインする学生による展示や説明を通して、「大阪市大モデル」の長屋改修・活用方法を、より具体的に知ってもらい機会となりました。

例年参加する会場も、今年から参加した会場も、住人や所有者、設計者などの「長屋人」がそれぞれの個性が詰まった空間を公開し、大阪長屋の保全・活用について自由に考え感じることのできる2日間となりました。

■阪口由佳（大阪市立大学生活科学研究科 修士2年生）



The 9th Open Nagaya Osaka 2019 was held in November 2019 as a “Kurashibiraki” event. The goal of this event was to maintain and make a good use of the disappearing Nagaya (terraced house) in Osaka. This year we organized 3 walking routes featuring 44 Nagaya. It turned out to be a good opportunity for over a total of 4000 participants to enjoy and get to know about Nagaya. During this two-day event, both Nagaya owners and participants were able to think and feel freely about the maintenance and use of Nagaya in Osaka.

都市創造性コラム9 Column for urban Creativity 9

ギターと創造性3：バイオリンのバスバーとの魂柱との比較から

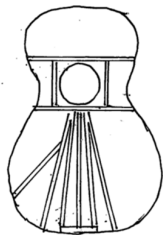
Guitar and Creativity 3: Comparison with Violin's Bass Bar and Soul Pillar

前稿で述べたように、テイラーギター社(Taylor Guitars)のマスタービルダーのアンディ・パワーズ氏(Andy Powers が考案した V-Class ブレーシングは、これまで二律背反といわれていた、トップ板の柔軟性からもたらされる「音量」とギター全体の剛性からのサスティン(音の伸び)とのバランスを目的としていた。

まず、論点の第一、テイラー社が独自技術である「ネックとボディとの接合部分」や「電子ピックアップ」、そして創業者で社長のボブ・テイラー氏がライフワークとしてきた「サステナビリティ活動」との関係性であるが、ボディ全体の剛性を高めることとユーザーのメンテナンス・フリー性を高める様々な試みが浸透するにしたがって、プレーシングの2つの機能である強度と音質とのバランスを取ることが容易となる。さらに、ES2の採用によって、テイラーギター社の電子ピックアップのさらなる改良が進展し、生ギターとしてよりもエレアコとして使用する頻度が高くなれば、高次倍音が複雑に発生するマーチンギターが主に開発してきた X ブレーシングの必要性がさらに低くなってきているといえよう。また、V-Class ブレーシングはある意味において、ガットギターで長く用いられてきたファンブレーシングへの回帰ともいえる。ファンブレーシングの発展過程において、タテ方向の7本のブレーシングを底辺部で束ねる部分を「V字型」と称されていたのである。

二点目、V-Classに変更する直前に行ったバックプレースの軽量化と斜めに傾けたことの意味について考察していこう。軽量化については材の有効活用の必要性によるものであることは明らかであろう。強度を減じない範囲でブレーシング材を少量化させることが求められる。また、バックプレースを斜めに配しつつ、テイラー社がV-Classに移行する直前において、トップ板とバック板とを連結するバーを配していた時期(約2年)があった。これについては、バイオリンに組

ファンブレーシング



Panormo, 1823 (after R.E.Brune)

み込まれるバスバー(Bass bar)と魂柱(Soul pillar)と比較すると理解しやすい。バスバーとは胴体部分の内部に縦についている棒で、主に強度を向上させる役割がある。また、魂柱とは表板と裏板を物理的につなげる木製の棒であり、音が裏板まで振動し、楽器全体に音が響かせる機能がバイオリンの魂柱と同様の機能を有す

と思われるサイドプレースは V-Class に移行した際に廃止されている。作りやすさ(修繕しやすさ)を追求するとともに、表板と裏板とを物理的に繋ぐバイオリンの魂柱からの脱却である。電子ピックアップを前提とした使い方からすれば、物理的な仕組みではなく、空気振動を電気振動に変換することに重きを置くことから考えれば、魂柱的なサイドプレースの除去は容易に首肯できよう。



バスバー (Bass bar)



魂柱(Soul pillar)

この様な革新を重ねながら、テイラー社はトヨタ生産方式を常に意識した「ものづくり」のノウハウの蓄積によって V-Class ブレーシングが開発され、これを組み込んでギターの既成概念を常に見直してきた帰結が、20世紀初頭から連綿と続くマーチン社の「ドレッドノート」からの脱却であった。これは長年のボブ・テイラー氏の悲願(マーチン社の生み出したボディデザインからの脱却)だったはずである。ただ、顧客がこれを望むか否かについては現時点では未知数である。ちなみに筆者は現在のところ、V-Class 派ではなく、従来の X ブレーシング派に属している。音楽の嗜好性(筆者の場合は CSN やニールヤング)と(ギターの)プレースタイル(open tuning によるインストゥルメンタル)によるところが大きい。

■岡野浩 (URP 教授、経営学研究科併任教授
City, Culture and Society (Elsevier) 名誉編集長・
Creativity, Heritage and the City (Springer) 編集長)

URP 
Osaka City University | Urban Research Plaza
大阪市立大学 | 都市研究プラザ

「都市研究プラザ」は、都市再生へのチャレンジとして大阪市立大学が2006年4月に設立した全く新しいタイプの研究教育組織です。「プラザ」という名前が示すように、都市をテーマとする人々が出会い、集まる広場をめざしています。先端的都市研究拠点として、現場や海外での研究・まちづくり活動、さらに、世界第一線級の研究者や政策家と国際的なネットワークを構築しています。

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138 tel.06-6605-2071
e-mail: office@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp
所長 阿部昌樹 副所長 全泓奎 林久善

大阪市立大学都市研究プラザ ニュースレター 第46号
編集長(発行責任者) 阿部昌樹
副編集長 全泓奎 水内俊雄 岡野浩
編集主幹 鄭栄鎮 波床尚美

<https://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp>

Regarding the aim of V-Class bracing creation by Taylor Guitars Co., we analyzed the relationship between “joint of neck and body”, “electric pick-up” and “sustainability activities” as well as the implication of light and angled back brace. At Taylor, by integrating V-Class bracing, which was developed through an accumulation of know-how, they constantly modified guitar sizes and at the end, they managed to “freed” themselves from the Martin’s Dreadnote body style which is becoming the standard body size since the beginning of the 20th century. This must be an accomplishment of long-cherished dreams of Bob Taylor, the co-founder and President of Taylor Guitars.